

編 集 後 記

我が九州保健福祉大学は、平成11年開学の若い大学であるが、年々着実に成長しつつある。すなわち、創設時の社会福祉学部と保健科学部に、薬学部が増設されて3学部となった。さらに、通信教育部、大学院に加えて、今年度はオープン・リサーチ・センターとしてのQOL研究機構が文部科学省の採択を受けてスタートした。

一方、研究成果の発表の場である本紀要は、このような大学の発展に対応し、社会の要請に応え、地域に根を下ろしたものでなければならない。本年度、紀要の編集の任に当たることになってまず痛感したのは、この問題であった。紀要を外部の第三者による評価に耐えられる内容にする為には、思い切った改革が必要であろう。差し当たり、紀要委員会規定の作成、編集作業の組織化と査読制度の確立、投稿規定の見直しなどが、その目標である。

本年度は、諸般の事情により、次の2点の改革に止まった。一つは、学外研究者と本学教員との共同研究論文を受け入れられるように投稿規定を改めたことである。もう一つは、投稿論文の内容は本学の倫理委員会、動物実験管理委員会および遺伝子・核酸組換え実験安全委員会の規定に従ったものでなければならないことを明記したことである。

今後の最大の課題は、査読 (peer review) の徹底であろう。いまや同じ専門分野の教員は各学部・学科に在籍しており、学部の壁を超えて十分に建設的なコメントを期待する現状である。従来のように各学科単位で委員が個人的に対応するのではなく、編集委員会が組織的に責任を持って対応し、学部横断的な査読制度を確立する必要がある。

アメリカのCDC (疾病対策センター) が刊行しているEmerging Infectious Diseases (EID) という、地球規模での自由投稿誌があり、現在、査読者 (peer reviewer) を募集している。"Opportunities for Peer Reviewers"と題するその一文の中の、査読の意義に関する部分を意訳してみる。「雑誌にとって、査読者は内容が優れた論文を選び刊行する上で欠かせない。一方、査読者は、金銭的には無償の作業ではあるが、査読を通じて少なからぬ報酬を得ることができる。すなわち、他人の原稿を読むことによって専門領域における研究の傾向と最新の研究成果を知ることができ、また、同じ領域の研究者に対する建設的なコメントを通して自分の発表技術を向上させることができる。査読は、経験の多寡を問わず、あらゆる科学者に専門的な発展の機会を提供する。」

来年度に向けて、紀要刊行の環境整備を行いたい。

紀要委員会委員長 南嶋 洋一

九州保健福祉大学 研究紀要 第6号

発行日 平成17年3月25日
発行者 学校法人 高梁学園
九州保健福祉大学
〒882-8508 宮崎県延岡市吉野1714-1
TEL 0982-23-5555
編集者 九州保健福祉大学研究紀要委員会
印刷社 明巧堂印刷株式会社